

# Abilities Measured を活用した TOEIC® Listening and Reading テスト スコアアップトレーニングの実践結果報告

山形 俊之<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学総合ビジネス・情報学科

## 【抄録】

本論は、筆者が「TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座 (TTT)」で学んだ知見を基に各科目で実施したスコアアップ指導の事例報告である。2018 年度以降、特に Abilities Measured を活用した指導法を実践してきた。本論では、筆者が各授業において実施した指導内容を紹介するとともに、その結果を示し、どれだけの成果につながったかを検証する。

## 【キーワード】

英語教育、TOEIC

## はじめに

筆者は『湘北紀要第 40 号』に投稿した「TOEIC® Listening and Reading Test 高得点取得を目指した学習指導法～TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座での学び～」において、株式会社アルクが主催する「TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座」(以降、TTT とする)について紹介し、筆者自身の TOEIC スコアアップ指導に対する考え方の変化や、TTT での学びに基づく新たな指導法について述べた<sup>1</sup>。

筆者はこの新たな指導法を以下の科目で導入した。

- ① 「TOEIC (初級)」2019 年度 (1 年次後期科目)
- ② 「TOEIC (中級)」2019 年度、2020 年度 (2 年次前期科目)

- ③ 「ゼミナールⅠ」2018 年度、2019 年度 (1 年次後期科目)
- ④ 「ゼミナールⅡ」2018 年度、2019 年度 (2 年次前期科目)
- ⑤ 「ゼミナールⅢ」2018 年度、2019 年度 (2 年次後期科目)

したがって、2017 年度生は途中から、2018 年度生以降はトレーニングの最初から新スタイルでの指導を受けたことになる<sup>2</sup>。とりわけ筆者のゼミに所属する学生は「ゼミナールⅠ (1 年次後期)」、「ゼミナールⅡ (2 年次前期)」、「ゼミナールⅢ (2 年次後期)」と 1 年半にわたって TOEIC® Listening and Reading Test (以降、TOEIC L&R テストとする<sup>3</sup>) スコアアップ対策授業を受講した。その 2018 年度生もコロナ禍の中、3 月に社会に羽ばたいていったことから、この 3 年間にわたる指導の成果をまとめることによって、自身の指導法の振り返りを行いたいと考えた。本論では、

<連絡先>

山形 俊之 yamagata@shohoku.ac.jp



図1 公式認定証の記載内容<sup>6</sup>

まず本論の中心となる TOEIC L&R テストの成績表とそれに基づいたスコアカウンセリングシートについて概観する。次いで、筆者が担当した各科目での指導とその結果について述べたい。特に筆者が注力した Abilities Measured（以下、AMとする）を意識した指導とカウンセリングシートを活用した指導を中心に、各科目で実施した指導法に焦点を当てる。次いで各科目における学習成果について言及する。半期科目の「TOEIC（初級）」と「TOEIC（中級）」については2回のIP TOEIC テストに基づいた成果報告になるが、「ゼミナールⅠ～Ⅲ」に関しては、2017年度生との比較も含めた成果報告を行う。最後に、筆者の指導の振り返りを行うとともに、さらに効果的な学習につなげる施策の可能性について言及する。

#### 1. Abilities Measured とスコアカウンセリングシート<sup>4</sup>

本論で述べる筆者の学習指導は、TOEIC L&R テストの結果に基づくものである。そこで、本章では TOEIC L&R テストの成績表と AM<sup>5</sup>、そし

#### [Abilities Measured の記載内容]

##### Listening

L1	短い会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる
L2	長めの会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる
L3	短い会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる
L4	長めの会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる
L5	フレーズや文から話し手の目的や暗示されている意味が理解できる

##### Reading

R1	文書の中の情報をもとに推測できる
R2	文書の中の具体的な情報を見つけて理解できる
R3	ひとつの文書の中でまたは複数の文書間でちりばめられた情報を関連付けることができる
R4	語彙が理解できる
R5	文法が理解できる

て筆者が作成したスコアカウンセリングシートについて簡単に説明する。

まず AM であるが、**図 1 の D** にあたり、リスニング、リーディングそれぞれ 5 つの項目における正答率 (%) がグラフと数値で示されており、各項目がどのような能力に該当するかが記載されている。そのコメントについては P.94 の **[Abilities Measured の記載内容]** の通りである (L はリスニング、R はリーディングを示し、番号は項目を示す<sup>7)</sup>)。各項目の正答率と、対応するパートや正答数との関係性については公表されていないが、多くの TOEIC 指導者の研究によって、おおよその関係は明らかにされている。その知見を基に、筆者は**図 2 と図 3** の各学生のカウンセリングシートを作成し、スコアアップ指導してきた。学生にはこれを表裏一枚のシートにして配布する。

このシートを作成した目的は、各学生が自分自身の弱点を明確にし、それを重点的にトレーニングすることにより、苦手を克服しスコアアップにつながられるようにすることである。そのため、このシートは AM を活用して、①自分の現状理解、②過去の状況との比較、③これからの学習へのアドバイスという 3 点を可視化した個人表になるように意識した。**図 2 と図 3** は最新版のフォーマットで、Version 3 にあたる。Version 1 ではスコアと AM の可視化 (グラフ) のみのシートであった。Version 2 では AM の各項目の推定正答数を加え、スコアアップカウンセリングとして、筆者からのコメントを記載した。Version 3 はこのマイナーチェンジになるが、各項目 60% の正答率を目標として掲げ、その目標達成に必要な推定正答数を加え、コメント欄を削除した。コメント欄を削除し

学生番号 _____	受験日 : 2020年1月			
氏 名 _____				
<b>【SCORE】</b>				
LISTENING SCORE	425			
READING SCORE	220			
TOTAL SCORE	645			
<b>【Abilities Measured】</b>				
«Listening Section»				
	取得率		正答数 (推定)	必要な正答数
L1	81%	<div style="width: 81%; background-color: #cccccc;"></div>	13 問	-3
L2	95%	<div style="width: 95%; background-color: #cccccc;"></div>	19 問	-7
L3	93%	<div style="width: 93%; background-color: #cccccc;"></div>	14 問	-5
L4	79%	<div style="width: 79%; background-color: #cccccc;"></div>	39 問	-10
L5	60%	<div style="width: 60%; background-color: #cccccc;"></div>	8 問	1
«Reading Section»				
	取得率		正答数 (推定)	必要な正答数
R1	36%	<div style="width: 36%; background-color: #cccccc;"></div>	8 問	5
R2	50%	<div style="width: 50%; background-color: #cccccc;"></div>	10 問	2
R3	42%	<div style="width: 42%; background-color: #cccccc;"></div>	13 問	2
R4	61%	<div style="width: 61%; background-color: #cccccc;"></div>	15 問	0
R5	62%	<div style="width: 62%; background-color: #cccccc;"></div>	12 問	0

図 2 個人スコアカウンセリングシート (表: 最新のテスト結果)

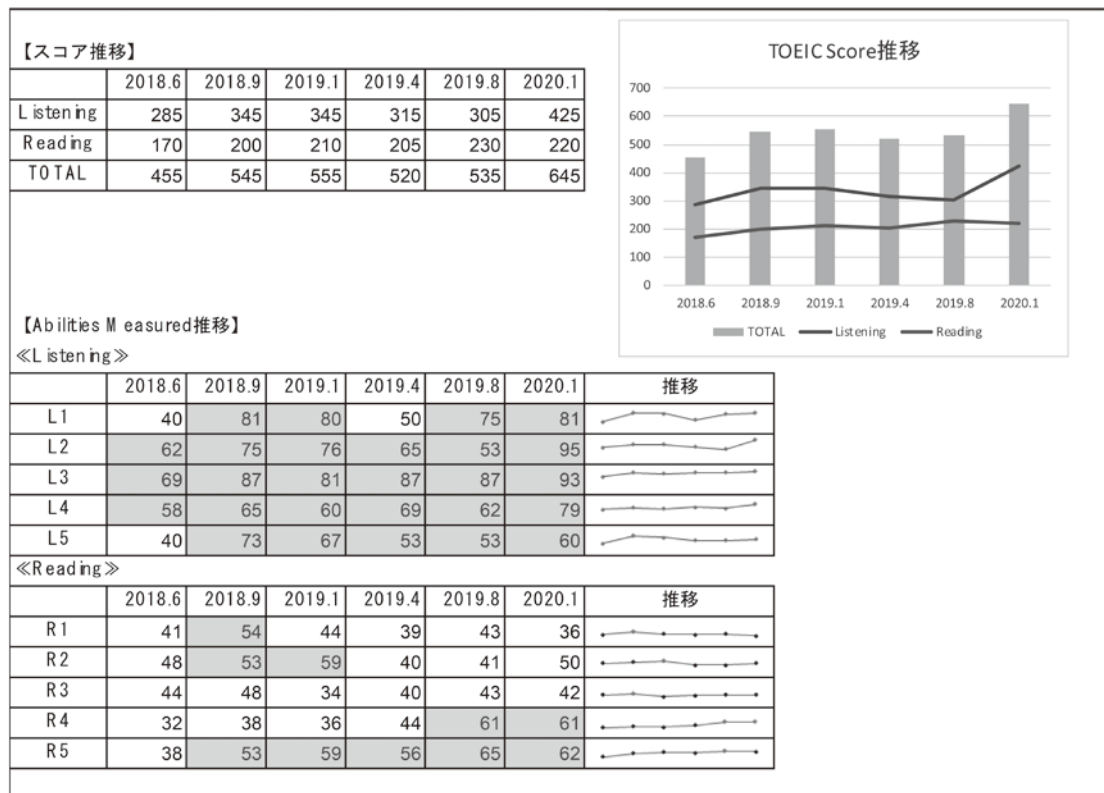


図3 個人スコアカウンセリングシート（裏：スコア履歴）

た理由は、このシートを配布する際に個別面談を実施し、自らの弱点とスコアアップに関する筆者からのコメントを学生自身に記述させるようにしたためである。この方式の方がVersion 2に比べ時間はかかる。しかし、筆者は資格試験の勉強は自ら学ぶモチベーションが最大の武器になると考えている。その観点から、この方式であれば学生自身が自分の現状や弱点を理解し、今後どのように勉強していけばいいかが明らかになるので、学習意欲の向上とスコアアップの両方を達成できると考えたのである。実際、この方式にしてから、各パートの正答数アップへの意識が高まり、テキストとして使用する模擬試験や公式問題集を自分で解く学生が増え、スコアが上がらなくなった時にも「このパートでスコアを上げるにはどうしたらいいか」

という質問が増えるようになった。したがって、Version 3のシートを使用したカウンセリング指導が学習モチベーションを高めたことは明らかである。また、AMの各項目へ意識を向けることにより、学生自身が取り組むべき学習に気づくことができるようになったことも、このシートの効用といえるだろう。

最近の取り組みとしてももう一つ加えたい。自宅での学習を可視化するべく「TOEIC L&R テスト学習ノート（図4）」を配布し、その日に学んだ内容を記載させている。

図は見開き2ページで1週分の記録ができるようになっている。記載させるのは学習時間ではなく分量である。項目は上から①日付、②単語、③文法、④Part 1～Part 7、⑤自分メモとなっている。

Abilities Measured とスコアカウンセリングシートを活用した TOEIC®

TOEIC Listening & Reading Test 学習記録表

【WEEK 15】

日付	今週の目標!!!	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	／ ( )	自己評価
単語	個/日	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	
文法問題	問/日	問	問	問	問	問	問	問	問	問	問	問	
Part1	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
Part2	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
Part3	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
Part4	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
Part5	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
Part6	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
Part7	問はやるぞ!	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	問/問	
自分メモ	今週の目標												

図4 TOEIC L&R テスト学習ノート

②ではその日にトレーニングした単語数、③は文法問題の数を記載する。この際、累計数を記載させることで、繰り返し学習も含めその日にどのくらいの分量を学習したかがわかるようになっている。④は各パートで解いた設問数を記載させる目的で、各項目は「問/問」とした。本来は「正答した数/解いた設問数」のつもりで作成したが、学生が自分なりの意味合いで使用することも多い<sup>8</sup>。大切なのは⑤である。ここには、何度も間違える単語や学習しての想い、授業日であれば筆者からのアドバイスなど、その日の学びで気付いたこと、考えたことを自由に記載できるようにしている。そして自分メモの左には「今週の目標」を記載させ、右端には「自己評価」欄を設けている。このノートは毎週授業前に確認し、その週の評価としてス

タンプを押している。2018年度生からこのノートを使用しているが、このノートにしっかり記載している学生のほうがスコアアップしている状況が観察できる。筋力トレーニングは実施内容や回数を記載するほうが高い効果が得られることから着想を得たものではあるが、自分の努力を数値化するだけでなくその推移が視覚化できることと、その日のトレーニングでの気づきを自分で振り返ることができるので、学習モチベーション維持には効果があるものと思われる。しかし、記載内容とスコアの相関について統計的な観測は難しいので、何らかの改良が必要なかもしれない。

## 2. 担当科目における学習指導とその結果

### 2-1 学生の Needs と Wants を考える

ここでは筆者が担当した科目で行った指導とその結果について述べるが、その前に本学学生が TOEIC L&R テスト対策授業を受講する動機について考えたい。以下に紹介する科目の中には、カウンセリングシートを積極的に活用しなかった科目もある。その理由は、学生の受講動機と個別指導に関係性が観察できたためである。

本学の大半の学生にとって、英語は「必要性 (Needs) に迫られて」行うことであり、積極的な英語学習を望む意欲 (Wants) の高い学生が多いとは言えない。この受講生の Needs と Wants を理解して指導することも TTT で学んだポイントであるが、筆者が担当した受講生をみると、科目によってこの Needs と Wants の割合は明らかに異なっていた。筆者は学生の Needs と Wants を把握するために、第1回目の授業で学生にアンケートを行い、受講の動機を確認している。1年生が受講する「TOEIC (初級)」や「ゼミナールⅠ」での回答を見ると、圧倒的に多い (箇条書きのトップに記載される) のが「就職活動におけるアピールにしたい」「就職先で英語を使用したい」という回答である。これは受講学生のほぼ全員が記載している。一方で「英語が好きで実力を伸ばしたい」や「500点を取得したい」という回答は10%に満たない。つまり学習を開始した1年生の段階では、Wants より Needs がはるかに上回っていることがわかる。これに対して、2年次前期に受講する「TOEIC (中級)」や「ゼミナールⅡ」では様相が変わってくる。具体的に「600点を超えたい」のようにスコアアップを第1の理由に挙げる学生が70%を超え、「就職先で使用するため」という回答は下位にランクされるのである。受講者数を見ても「TOEIC (初級)」は50名規模で「TOEIC (中級)」は10～20名と

いうことから、ここで明らかになったことは、2年次の授業にはスコアアップを目指す学習意欲の高い学生が多く、Wants の割合が高くなっていることである。したがって、本学学生の受講動機を図式的に表すと以下のようなになる。

初心者・初級クラス (1年次) : Needs > Wants  
 中級クラス (2年次) : Needs < Wants

この事実に加え、筆者のゼミ学生から興味深い意見を聞くことができた。後述するように、筆者のゼミでは初級の「ゼミナールⅠ」のころからカウンセリングシートを活用したが、卒業時に、スコアカウンセリング指導について意見を聞いたところ、「スコアが低かったころからこのカウンセリングを活用していればよかった」という意見とともに、「このようなカウンセリングは2回以上受験しないと意味はないと思うし、目標スコアも各パートの攻略法もはっきりしない中でカウンセリングを受けても、その内容は入ってこないと思う」という意見が多かった。さらに、「カウンセリングを行うなら、ある程度勉強してスコアアップした後、さらに飛躍したい学生向けだと思う」という意見も挙がった。「最初からカウンセリングを活用しておけばよかった」と述べた学生たちも次のようなコメントを加えている。「しかし、最初のころは TOEIC が何かもわからなかったし、結局最初の頃にそれを言われてもピンとこなかったかもしれない。」もちろんこれは一部の意見に過ぎないだろうし、筆者のカウンセリング力が不十分だったために挙がったコメントかもしれない。しかし、本学学生のように必要性に駆られて英語を学ぶ学生たちにとって、最初からカウンセリングを行うより、まず TOEIC L&R テスト対策をしっかり行い、自分のスコアが上がり、さらにスコアアップを目指すという目的が芽生えた時にカウンセリングを

実施したほうが効果的だったことを示す意見でもある。

以上のことから、Needs が優勢の段階よりも Wants が優勢の段階の方が、カウンセリング指導が学習意欲を刺激し、さらなる高みを目標とするモチベーションになると考えられる。この点を考慮し、本学の学生に関する限り、カウンセリングシートは学生の学習目的によって柔軟に活用しながら指導を行ってきた。その事例を紹介する。

## 2-2 TOEIC (初級)

この科目の概要は以下のとおりである。

科目名：TOEIC (初級) A (選択科目) <sup>10</sup>

配当年次：1 年次後期

開講年度：2019 年度 <sup>11</sup>

目標スコア：400 点

受講者数：57 名

(学習後の IP TOEIC テスト受験者 52 名)

学生の受講動機としては「TOEIC L&R テストのスコアが高いと就職に有利だと聞いたから受験したい」というものが圧倒的に多い。そのため、この科目ではスコアカウンセリングシートを用いた個別指導は実施しなかった。その代わりに、受講前に義務付けている IP TOEIC テストの成績表を参照させながら指導を行った。

この授業において筆者が意識していることは、「先入観の払拭と自信をつけること」である。上述のように、受講生にとって3月から始まる就職活動に際して、履歴書に書けるようなスコアが取得できるかどうか最大の関心事であるし、この講座を受講した目的であることから、以下の3点を重点的に指導した。

① 各パートのしくみ (AM との関連性)

② 試験時間の効率的な使い方

③ 英語の基礎力強化 (スコアに直結する内容を中心に)

つまり、この授業で筆者が焦点を当てたのは、TOEIC スコアアップに必要な TOEIC 受験力向上 (①と②) と英語の基礎力向上 (③) である。ではそれぞれをもう少し詳しく紹介しよう。

第1回目の授業ではガイダンスと上述のアンケートに回答してもらった。ガイダンスでは TOEIC L&R テストの基本情報や受験者の平均スコアについて概説するとともに、スコアアップに必要な学習について解説する。とりわけ400点という目標をクリアするためにどの程度正解すればいいかについては強調している。学生がこれまで受験してきたほとんどのテストの最終到達目標は「満点」または「ある点数以上が合格」というものである。しかし TOEIC L&R テストはそのようなテストではない。簡単に言えば「学習成果がスコアになる」テストである。したがって「満点を狙わなければいけない」または「全問正解を目指さなければ」という学生の先入観を払拭するとともに、以降14週の学習に対するモチベーションを下げないようにしたいと考えている。

第2回目の授業は各自の IP TOEIC テストの成績表を使用し、AM の見方を説明する。特に、AM の各項目とそれに対応するパートについて重点的に説明する。本来ならば自分が苦手なパートを意識させることが重要であろう。しかし本講座の受講者のほとんどは、パートごとの正答率もまだ全体的に低い状態にある。したがって、スコアアップのためには全体的な正答率の底上げが必要になる。このことから、学生個人の弱点を意識させるよりも、第3回目以降に実施するパート別の説明にリンクさせる方が、学習効果の向上だけでなく学習モチベーションの維持にもつながるのではな

いかと考えた。

第3回以降の授業では、テキストに沿って TOEIC L&R テストの各パートの特徴および、設問と AM の関係を解説し、問題を解いていくというスタイルをとった。2時間の英語漬けに慣れていない学生にとって、集中力を維持させることも非常に困難な課題になる。そこで、学生には「全問解く必要はない。解くべき問題を確実に解こう」と繰り返し指導した。そして各パートの「解かない問題」を自分自身で見抜くことと、「正答しやすい問題」を確実に解くことに集中させた。これにより、目標スコアのために解くべき問題に集中して取り組むことができる。

基礎力強化に関しては、副教材を使用して語彙、文法の基礎を固めることと、リスニング力向上の観点から Part 1, 2 のリピーティングを実施している<sup>12</sup>。シャドウイングの指導も行ったが、受講生には少し難しかったようで、発音はできて意味がイメージできないという意見が多かったことから、リスニング力向上については Part 1, 2 の短い文を利用してリピーティングを重点的に行い、音と意味とがリンクできるようになった学生にはシャドウイングを指導した。

本科目の学習成果は以下のとおりである。なお、2019年度は本科目の開講年度であり、選択科目という性質からも受講者全員に受講前の IP TOEIC テストを義務付けてはいなかった。そのため、受講前後の得点を比較できるのが57名中42名(74%)であった。さらに、学習後の IP TOEIC テストを受験しなかった学生が5名いるので、平均スコアと目標得点取得者数は52名の学生のデータであることを付け加えておく。

- ・ 受講開始時の平均スコア：272 点  
(比較対象者 42 名)
- ・ 受講後の平均スコア：335 点

(比較対象者 42 名の平均：333 点)

- ・ 400～495 点取得者：9 名 (全体の 17%)
- ・ 500～595 点取得者：1 名 (全体の 2%)
- ・ スコアアップした学生数：39 名

(比較対象者の 93%)

(内訳)

- 50～95 点向上：15 名 (比較対象者の 36%)
- 100～145 点向上：7 名 (比較対象者の 17%)
- 150 点以上向上：2 名 (比較対象者の 5%)

受講生全員の比較資料がないので明確なことは言えないが、残念ながら指導の成果が出たとはいえない。比較可能な 42 名のうち 93% の学生がスコアアップを果たし、平均スコアが 61 点向上したとはいえ、50 点以上向上した学生は 24 名 (57%) である。何より本講座の目標点数である 400 点に到達した学生が全受講者中 10 名 (19%) に過ぎなかった。

この結果の要因を考えると、一つは自主学習をフィードバックするシステムを作っていなかったことが挙げられる。後述するように、筆者のゼミナールでは「学習ノート」を作成し、毎週そのチェックをしているのだが、このクラスは人数が多いこともあり、その点をおろそかにしてしまった。週一回の授業なので、自宅学習が結果につながることは明らかである。そのため、多人数でも自宅学習の成果が確認できるシステムを構築する必要があると感じた。もう一つはテキストである。今回テキストとして 400 点取得を目指した大学英語教科書テキストを使用した。このようなスコア別の問題集の最大のメリットは、問題が目標スコア取得に向けたレベルのものに限定され、効率よく学習できることである。一方で、そのレベルの学生にとって「解かなくていい問題」が掲載されていないことも事実である。テキストの性質上仕方ないのだが、実際そのような問題にも触れさせる



必要もあるのではないかと考えた。もちろん例題として筆者も説明はしたが、テキストに掲載がなければ学生の記憶には残らないだろう。そのため、次年度は『公式 TOEIC® Listening and Reading 問題集』（以降『公式問題集』とする）の使用も視野に入れ、この対策を考えたい。また、受講者全員に事前の IP TOEIC テストを義務付け、より正確な学習成果を出すことと、上記の反省点を改善し、目標スコア取得学生数を向上させることも課題である。

### 2-3 TOEIC（中級）

この科目の概要は以下のとおりである。

科目名：TOEIC（中級）（選択科目）

配当年次：2 年次前期

開講年度：2019 年度、2020 年度

目標スコア：500 点以上

受講者数：2019 年度 7 名

2020 年度 27 名

本講座は 2019 年度から 2 年生向けに開講した科目である。本科目の履修条件は「TOEIC L&R テストで 350 点以上取得していること」なので、受講生のほとんどは一度 TOEIC テストを受験し、スコアアップしたいというモチベーションがある学生と考えていい。ただし、条件以下のスコアの学生でも、本人に学習へのモチベーションがあれば履修許可している。その場合は自宅学習課題をやや多めに課している。

受講動機で学生を区分すると、①「600 点以上のスコアを取得したい。」②「英語が必要な環境に就職する（したい）ので英語力を上げたい。」③「内定先で TOEIC のスコアがあるといいと言われたから」という 3 つに大別されるが、ほとんどの学生が①に該当する。②と③は 1～2 名である。したがっ

て、学習の動機としては Needs もあるが自分の能力を向上させたいという Wants も高い学生が受講していることになる。

この授業で筆者が指導ポイントと考えているのは、①「カウンセリング指導による弱点強化」と②「情報処理力の向上」である。これが有効に機能し学生のスコアアップにつながることを筆者の目標といってもいい。もちろん基礎力の向上も欠かせないが、その点は自主学習にゆだねている。基礎力向上としては「TOEIC（初級）」同様、語彙の増強と文法問題に焦点を当てている。指導ポイントの 2 点についてみていこう。

1 点目の指導については、各学生にスコアカウンセリングシートを配布し、特に弱点となるパートを明確にするとともに、基礎力向上によりスコアが上がる可能性を示唆しながら具体的な対策をアドバイスする。授業外学習は個人でその強化に努めてもらうことになるが、アドバイスに際してはテキストの具体的な問題をピックアップし、その問題を重点的に学習するように指導する。一方で、授業中は同じ弱点を持っている学生をグループにし、問題を解くグループワークを行う。グループワークでは、正答につながるヒントについて学生同士意見を出し合い、考えながら学習している様子が観察された。特にリスニングでは、お互いに聞こえた音を教えあうなどの作業を通じて、グループ内の学生全員のリスニング力向上が見られた。「わからないのはみんなも同じ」という状況の中でグループ全員が正答にたどり着けたことが、個々の学生の自信につながっているのかもしれない。筆者は、グループメンバーがどうしてもヒントにたどり着けないときに、リスニング速度を変えさせる、文法的なヒントを少し与えるなど、グループ内の議論が活発になるように背中を押すことを意識している。

もう一方の情報処理力向上につながる指導につ

いては、特に Part 3, 4, 6, 7 には全体的なストーリー内容がわからないと正答にたどり着けない問題も見られることから、ストーリーの内容に意識を向ける指導を行った。筆者が注力したのはリーディングで、素材として主に使用するのは Part 7 である。まず 1 文を正確に読むトレーニングをさせる。次いでパラグラフの内容とメッセージを理解してもらう。そして最終的には複数のパラグラフのつながりからパッセージ全体の内容とメッセージの理解につなげるという段階的な指導を行っている。この指導にも、後述する「ゼミナール」同様、グループワークを用いた指導を考えていた。しかし本科目での指導はまだ不完全といわざるを得ず、それは結果にも表れている。理由については後述する。

2019 年度、2020 年度の本科目の結果は以下のとおりである。

**【2019 年度】**

- ・ 受講開始時の平均スコア：290 点
- ・ 受講後の平均スコア：348 点 (58 点向上)  
 (内訳) 400 ~ 495 点取得者：2 名 (29%)  
 500 ~ 595 点取得者：-
- ・ スコアアップした学生数：6 名 (86%)  
 (内訳) 50 ~ 95 点向上：-  
 100 ~ 145 点向上：3 名 (43%)

**【2020 年度】**

- ・ 受講開始時の平均スコア：422 点
- ・ 受講後の平均スコア：439 点 (17 点向上)  
 (内訳) 400 ~ 495 点取得者：11 名 (41%)  
 500 ~ 595 点取得者：5 名 (19%)  
 600 ~ 695 点取得者：1 名 (4%)  
 700 ~ 795 点取得者：1 名 (4%)
- ・ スコアアップした学生数：13 名 (48%)  
 (内訳) 50 ~ 95 点向上：6 名 (22%)  
 120 ~ 145 点向上：2 名 (7%)

150 点以上向上：1 名 (4%)

2019 年度、2020 年度ともに反省が多い結果になったといわざるを得ない。学習者全体を見ればスコアが向上したことになる。しかし、目標の 500 点を取得した学生は、2019 年度は 0 名、2020 年度も 7 名 (26%) のみだった。しかし要因を一言で述べると、上述の指導が機能しにくい要素があったためといえよう。

2019 年度は、それまで本学では体系的な TOEIC L&R テスト対策カリキュラムがなかったことから、履修条件を「300 点 (それ以下の受講希望者は応相談)」とシラバスに記載した。しかし受験希望者のうち条件を満たす学生が 3 名しかいなかったため、条件以下の学生にも受講を許可した結果、220 点から 365 点まで幅広い学生がそろってしまった。さらに 2018 年度の初級者向けクラスでは、英語基礎力向上に注力した授業が行われており、TOEIC 受験力向上に向けたトレーニングが不足していた。そのため、テキストとしては 500 点取得向けのテキストを使用したのが、本来初級科目で実施する TOEIC L&R テストについての体系的な学習を同時に行うことになった。つまり、「TOEIC (初級)」の学習内容を繰り返す必要があったため、本来実施すべきグループワークや読解力強化に十分な時間を割くことができなかったことがこの結果につながったと考えられる。一方の 2020 年度については、コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンラインでの授業実施になり、授業での個別指導やグループワークがうまくできず、①も②も十分な指導ができなかった。その対策として、急遽解説事項を動画で撮影し、事前に学習してもらう反転授業に切り替えた。動画は学生からおおむね高評価をもらったが、授業そのものに対しては「画面越しで、先生から自分が見えていないと思うと授業を受けている気がしない」「自宅では集中して

授業が受けられない」という意見が多く、なかなか学習が結果に結びつかなかったと思われる。また、自宅学習を確認することができなかったことも一因といえよう。もちろん筆者の力不足によるところも大きいので、この反省を次に活かしていきたい。

## 2.4 ゼミナール

最初に述べたように、本学では「ゼミナール」は3つに区分され、通算で1年半同じ学生を指導する。そこで、授業概要は入学年度で区分することにする。

### ①受講者数

2017年度生：16名

2018年度生：20名

2019年度生：17名

### ②目標スコア

ゼミナールⅠ：400点

ゼミナールⅡ：400～500点

ゼミナールⅢ：500以上

### ③使用テキスト（カッコ内は使用年度）

メインテキスト

- ・ヒロ前田、ロス・タロック『TOEIC® テキスト 新形式問題やり込みドリル』（2017）
- ・ヒロ前田、テッド寺倉、ロス・タロック『TOEIC® L&R テスト至高の模試600問』（2018、2019）
- ・ヒロ前田『TOEIC® L&R テスト究極の模試600問+』（2019、2020）
- ・ETS『公式 TOEIC® Listening and Reading 問題集4』（2017）
- ・ETS『公式 TOEIC® Listening and Reading 問題集5』（2018）

副教材

- ・TEX 加藤『TOEIC L&R TEST 出る単

特急 銀のフレーズ』

- ・高橋恭子『TOEIC® L&R テスト 英文法ゼロからスコアが稼げるドリル』
- ・高橋恭子『TOEIC® L&R テスト リスニングゼロからスコアが稼げるドリル』（2019年後期より使用）

この科目は実質的に1年半の対策講座という長丁場になるので、講義形式、演習形式、アクティブラーニングなど、様々な要素を取り入れないとモチベーションの維持が難しい。ここでは各ゼミナールの期間に実施した指導内容とその結果を紹介する。

まずテキストについてだが、TTTに参加する以前は、大学英語教材を使用し、テキストに沿って学習を進めることに終始していた。指導として各学生のスコアのアップダウンは確認していたが、スコアアップするための具体的な策をアドバイスすることはできなかった。リスニングが低ければリスニング問題を中心に学習する、リーディングが苦手な学生にはリーディング問題や文法問題を学習するといった抽象的なアドバイスしかできなかった。しかし、TTTに参加し、スコアのしゅみを学ぶことができたので、それを指導に活用することで、学生のモチベーションも維持しながらスコアアップさせることができるのではないかと考えた。そこで2018年度以降、つまり2017年度生の「ゼミナールⅡ」からは、個々の学生より具体的な指導をするため、テキストとしてAMの分析ができる模擬試験と公式問題集を選定した。以下の指導はこのテキストに基づいて行われている。

「ゼミナールⅠ」では、「TOEIC（初級）」と同じく、英語基礎力向上とTOEIC受験力の強化を重点的に実施する。前者については、副教材を使用して語彙と文法、Part 2のリスニング問題を自宅学習中心に進めてもらう。自宅学習については、学

習内容を「TOEIC L&R テスト学習ノート」に記載させ、授業の最初に確認する。語彙については3日で50語、1週間で100語をノルマとする。文法問題は特に問題数は決めていないが、副教材の章立てがTOEICテスト頻出の6つの文法項目になっているので、1週で1章分の問題を繰り返すように指導している。リスニングも、副教材の章立てがPart 2の設問形式に沿っているので、1週に1章を繰り返させている。この文法問題とリスニング問題は1日ずつ交互に学習することによって、毎日少しずつでも英語に触れる時間を作るようにしている。実際にはノルマが多いために達成度が甘くなってくる時期が必ず見られる。その際にはスコアカウンセリングシートを活用して個別に学習指導を行う。

一方のTOEIC受験力の強化では、「TOEIC（初級）」同様、「先入観の払拭と自信をつけること」を意識しながら、授業2回で1つのパートの説明と演習を行うスタイルをとっている。1回目でそのパートの特徴や設問の種類、解かなくていい問題について解説する。時間配分についても、リーディングのみならずリスニングでも有効な時間の使い方や力を抜くポイントも指導する。2回目以降の授業では設問の種類別に問題を解く。この時には自分の得意、不得意を自覚するように指導している。実際、Part 7の指導をする際には通常の授業だけでは足りないので、「サブゼミナール」と称して週2回の授業を実施する。これはPart 7に特化した授業で、6回程度実施する。どの学習段階においても各パートとAMとの関連性を自覚させるようにしている。もう少し具体的な取り組みとして「ゼミナールⅠ」でのスコアカウンセリングシートの使用について触れよう。

大半の学生がまだIP TOEIC テストを1度しか受験したことがないので、自らのスコアを比較検討する材料がないというのは「TOEIC（初級）」と

同じ状況である。そのため、同じように授業の最初にAMの読み方について説明し、各パートの説明をする際にAMとの関連について説明するわけだが、「ゼミナールⅠ」ではもう一步踏み込んでいる。各パートの学習ごとにスコアカウンセリングシートに記載されている現段階の正答率を確認するように指導している。そして、弱点が同等の学生をグループにして、グループワークの形で問題に取り組んでもらう。そのグループへの指導の際には、気を付けるべき学習のポイントやどのくらい向上しているかをスコアカウンセリングシートに自分で記載させる。「自分で書く」という行為により、自分の現状を自覚させることが目的であるが、その週の学習ノートに指摘部分を重点的にトレーニングした後が散見されることから、学習モチベーションの向上にもつながっていることがわかる。さらに、この活動の中で興味深いことがわかった。グループの中で正答を導き出せた学生が、そのポイントをグループ内で共有することでグループ全体の正答率向上につながるという結果が見られたことである。統計的に確認してはいないことに加え、「ポイントに気付く学生がいれば」ということが条件になるので、確実性は低いかもしれないが、学生同士の気付きがスコアアップにつながりやすいという状況があるのならば、積極的に活用する価値はあるだろう。「TOEIC（中級）」でこのアクティビティーを取り入れたのは、「ゼミナールⅠ」でその有効性がスコアに現れたためである。

以上のように、「ゼミナールⅠ」では特に各パートとAMの関連性について自覚することに焦点を当て、「TOEICテストに関する知識」を身につけさせて、「ゼミナールⅡ」に入っていく。

「ゼミナールⅡ」は、スコアアップトレーニングの第2段階という位置づけである。しかし2年次前期は学生の集中力を保つのが困難な時期にもな

る。それは就職活動のシーズンと重なるためである。欠席が多くなることに加え、授業でも集中力がなく、自主学習の精度が下がるのもこの時期である。そのため、学生のモチベーションにつなげる意味でも個別指導が有効ではないかと考えている。「ゼミナールⅡ」では、個別指導を本格的に活用し、弱点強化とともに情報処理力の向上を目指している。

筆者のゼミでは前年度1月と7月に実施されるIP TOEIC テストに加え、3月に実施される公開テストの受験を義務付けている。したがって、授業が始まるときには少なくとも3回の受験を経ていることになる。この3回の結果から、正答率の低い部分を重点的に学習するよう指導する。とはいえ、学生は「ゼミナールⅠ」で各部分に関して学んでいるので、不得意な問題もある程度自覚できていることが多い。そのため、「ゼミナールⅡ」では、具体的に必要な正答数を目標にテキストを解かせる。そして15回の授業中、4回は個別指導の時間を設け、その進捗を測っている。

一方で、AMの中で正答率が十分な項目をさらに向上させることも必要になるので、「ゼミナールⅠ」では「解かなくていい問題」として指導した問題にもチャレンジさせる。この種類の問題というのは、「TOEIC (中級)」でも述べたように、ストーリーの理解が必須となる問題である。言い換えれば、一文を聞き取る（あるいは読み取る）ことで正解できる問題ではなく、いくつかの文またはパラグラフのつながりを意識しないと正解できない問題とっていいだろう。ここに必要なのが「情報処理力」である。そのトレーニング方法はさまざままで、これから述べるものが最適かどうかはわからないが、トライ&エラーを繰り返す中でスコアアップにつながったものを事例として紹介する。

まず筆者は「不正解の理由」に注目させることから始めている。なぜ4つの選択肢の中から3つ

(Part 2では2つ)の選択肢を「不正解」としたのかは、ストーリー的に「あり得ない」ことを理解しなければならない。そうでない場合、「複数の選択肢が正解に思える」状態になってしまう。そのような迷い方をする学生は実に多い。そこであえて「ストーリーを元に不正解をはじき出す」トレーニングを3～4回の授業で行う。これはゲーム的に実施するのが効果的であった。最初は全員で行うが、やはりスコアが高い学生のほうがだんだんとストーリーに意識が向いているので、スコアカウンセリングシートを元に5人程度のグループを作り、リスニングではPart別に、リーディングではPart 7の文書の種類（メール、広告、記事など）に分けて前述のグループワークを実施する。これにより、グループ内での気づきを得ながらスキルアップしているようで、正解と不正解の選択肢を明確に分けられるようになってくる。次に、一度に理解する分量を増やすことを目標とした学習を行う。まず「TOEIC (中級)」で示したように精読からパラグラフリーディングを段階的に指導する。そのあとで、本文の読解にかける時間を意識させるため、設定した時間内で本文を読み要約を書き出すという作業を行った。当初は一斉に行っていたが、これはスコアが低い学生には難しいと分かったので、個人トレーニングに切り替えた。最初に自分で時間を測り、それをテキストに書いておき、2回目にトライしたときにそれより速く読むことを目標にトレーニングをさせた。1回目と2回目の間には解説を使って語彙や表現を確認する時間を設ける。授業内では多くの文書はトライできないので、1日に文書3つの読解を1日おきにトレーニングする課題を出した。ただし、語彙と表現のチェックは1日目のみとしているので、1日目は一つの文書に2回トライできるが、2日目と3日目は1回ずつしかトライさせない。したがって、1週間かけてその文書を最低4回読むことになる。1日おきにし

たのは、記憶をリセットする期間を設けるためである。語彙や表現のチェックも済んでいるので当然3回目は1回目に比べて速く読んでいるわけだが、このトレーニングを繰り返すことで、初見の文書を読ませても明らかにスピードが上がる事が確認できた。リスニングでは音声の速度を少しずつ早くしていくトレーニングが学生には好評だった。学生からは「ゲーム感覚で楽しい」「1.0倍速が遅く感じる」という反応が得られた。

「ゼミナールⅢ」はトレーニングの最終段階であるが、モチベーションがある学生とない学生の差が開いてしまっている時期にもなる。2年次後期なので、悪い言い方をすれば、惰性で卒業できればいいという雰囲気が学生から強く感じられる時期といってもいい。さらに10月末には最後のイベントになる学園祭とも重なるので、やはり集中力は上がらない。一方で、筆者のゼミでは、「ゼミナールⅡ」受講後のスコアよりも50点以上上がった場合は不合格(留年)になるという条件があるので、後半になってやっと火が付く学生が多い。そこで、本講義では、前半は「ゼミナールⅠおよびⅡ」の学習内容の復習にあて、11月になってから短期集中のスタイルで最後のトレーニングを行う。具体的には、①個別指導による弱点の明確化と弱点強化の集中トレーニングと②情報処理力のさらなる強化の2点に集中する。とはいえ、Part 7のダブル・パッセージ(DP)とトリプル・パッセージ(TP)の集中トレーニング以外は新しいことはない。「ゼミナールⅡ」で紹介したリスニングおよびリーディングの速度アップトレーニングをとにかく繰り返す。「卒業できるかどうか」というやや不純なモチベーションを利用することになるので、トレーニングに飽きるのが早いことが難点だが、それでもDPとTPのトレーニングが集中力持続に役に立っていると思われる。

授業で実施したのは、反応速度を上げるゲーム

である。一つのパッセージを全部読ませた後、筆者が日本語でその内容について質問する。そして、質問一つにつき、筆者がランダムに選んだ学生が5秒以内に答えるという単純なもので、解答は日本語でも英語でも、関連するキーワードを英語で答えるだけでもいい。この際に注意すべき点が2つある。まず実際の設問として問われる可能性のある質問を投げかけることである。例えば「このメールを書いている人の職業は?」「この announcement は誰向けのもの?」「来週の木曜日にこの会社で行われることは?」「この商品の特徴は?」「この文書を読んだ人はこのあと何をするの?」などである。もう一つ注意することは、設問には触れさせないことである。このゲームは、「即解」を意識させることが大切なので、最初のうちは不正解でもいいからとにかく答えさせる。そして5秒で答えることが染みついてきたところで、次の段階に移る。それは読む時間を制限することと、選択肢から正解を狙いに行く意識を持たせることである。前者のトレーニングに使う基準は、テキストに付属するパッセージの音読である。1倍速で読み上げられる時間内に読むことを意識させる。後者については、テキストの設問を読んだ時に頭の中に正解を用意してから選択肢を見るトレーニングを行う。この「答えを用意する」ことに上述のゲームが活かされる。つまり、このトレーニングは「文書を読んでから解答する」というスタイルを徹底させるトレーニングである<sup>14</sup>。このトレーニングの結果として、「ゼミナールⅢ」受講後のスコアが1年半を通じた最高得点になる学生が毎年半数以上みられる。

このようなトレーニングを行った「ゼミナール」の学習成果は以下のとおりである。

107 ページの表1を見ると、どの学年も半期の授業毎にスコアが向上できているのがわかる。また、上述したような学習内容は、毎年反省点を改善し

	2017年度生	2018年度生	2019年度生
受講前	273点	321点	335点
ゼミナールⅠ	351点	404点	472点
ゼミナールⅡ	388点	433点	494点
ゼミナールⅢ	400点	440点	524点
スコアアップ	145点	142点	190点

表1 受講前と受講後の平均スコア

つつ新たな施策も取り入れているので、その結果として2019年度には「ゼミナールⅢ」受講後の平均スコアが500点を超えるようになった。卒業までに400点以上のスコアを取得した学生数の内訳は以下のとおりである。

	2017年度生	2018年度生	2019年度生
700～795点	－	－	1名(6%)
600～695点	－	2名(10%)	4名(24%)
500～595点	3名(19%)	4名(20%)	6名(35%)
400～495点	7名(44%)	9名(45%)	4名(24%)

表2 最高スコアが400点以上の学生数

例年60%くらいの学生が400点以上のスコアを取得して卒業していたが、本学の目標である500点を超える学生は20%程度であった。また2017年度まで600点以上を取得する学生を3名しか出すことができなかった。しかし2018年度以降はその数は増加しており、2019年度は65%の学生が500点以上のスコアを取得できた。1年半の授業を通じてのスコアアップの内訳確認してみよう。

	2017年度生	2018年度生	2019年度生
300～395点	1名(6%)	－	3名(18%)
200～295点	2名(13%)	3名(15%)	6名(35%)
100～195点	10名(63%)	11名(55%)	7名(41%)
50～95点	1名(6%)	5名(25%)	1名(6%)

表3 卒業までのスコアアップ内訳

表3からわかるように、2017年度生と2018年度生は100～195点の範囲でスコアアップしている学生が過半数を占め、200点以上スコアアップした学生は20%に満たなかった。しかし、2019年度生は200点以上スコアアップした学生が過半数になった。人数で比較しても2017年度生や2018年度生の3倍になっている。

各ゼミナール受講後の得点分布からも、興味深い特徴が見える。

まず表4～6の「スコアアップした学生数」に注目すると、「ゼミナールⅠ」受講後にはほぼ全員のスコアアップが観察できる。これはTOEIC L&R テストに対する理解と基礎的な英語力向上のトレーニングの成果といえる。一方、「ゼミナールⅡ」以降はその比率が下がるのは、2点の理由が考えられる。一つ目は就職活動や学園祭など、トレーニングへの集中力を妨げる要因が多いことである。もう一つは、この時期に学習する内容がある程度の分量の英語を一度で処理するスキルを向上させるトレーニングになること、つまり学習の難易度が上がることである。その中でも60%～80%の学

	受講前	ゼミナールⅠ	ゼミナールⅡ	ゼミナールⅢ
平均スコア	273点	351点	388点	400点
700～795点	－	－	－	－
600～695点	－	－	－	－
500～595点	－	－	1名(6%)	2名(13%)
400～495点	－	3名(19%)	5名(31%)	8名(50%)
300～395点	7名(44%)	9名(56%)	9名(56%)	4名(25%)
200～295点	8名(50%)	4名(25%)	1名(6%)	2名(13%)
100～195点	1名(6%)	－	－	－
スコアアップした学生数		16名 <sup>15</sup> (100%)	9名 <sup>16</sup> (56%)	12名 <sup>17</sup> (75%)

表4 2017年度生の平均スコア内訳

	受講前	ゼミナール Ⅰ	ゼミナール Ⅱ	ゼミナール Ⅲ
平均スコア	321点	404点	433点	440点
700～795点	-	-	-	-
600～695点	-	-	1名(5%)	1名(5%)
500～595点	1名(5%)	2名(10%)	5名(25%)	4名(20%)
400～495点	2名(10%)	8名(40%)	6名(30%)	8名(40%)
300～395点	8名(40%)	9名(45%)	7名(35%)	6名(30%)
200～295点	9名(45%)	1名(5%)	1名(5%)	1名(5%)
100～195点	-	-	-	-
スコアアップ した学生数		19名 <sup>18</sup> (95%)	13名 <sup>19</sup> (65%)	12名 <sup>20</sup> (60%)

表5 2018年度の平均スコア内訳

	受講前	ゼミナール Ⅰ	ゼミナール Ⅱ	ゼミナール Ⅲ
平均スコア	335点	472点	494点	524点
700～795点	-	-	-	1名(6%)
600～695点	-	1名(6%)	3名(18%)	3名(18%)
500～595点	-	4名(24%)	6名(35%)	6名(35%)
400～495点	4名(24%)	10名(42%)	6名(35%)	5名(29%)
300～395点	7名(41%)	1名(6%)	1名(6%)	2名(12%)
200～295点	6名(35%)	1名(6%)	1名(6%)	-
100～195点	-	-	-	-
スコアアップ した学生数		17名 <sup>21</sup> (100%)	11名 <sup>22</sup> (65%)	14名 <sup>23</sup> (82%)

表6 2019年度の平均スコア内訳

生がスコアアップをしているのは、個別指導により自分がトレーニングすべきパートが明確になっていることと、授業内のアクティビティーが有効に機能しているためだと思われる。また、4回の個別指導で、自分のスキルアップが確認できることにより、学習モチベーションが維持された結果とも考えられる。

各表の太字の部分は上述した各科目の目標スコ

アを超えた学生数とその割合である。これを見ると、2017年度生の中で目標スコアを超えた学生は50%に満たなかった。しかし、2018年度生は、「ゼミナールⅠ」と「ゼミナールⅡ」受講後で目標スコアを超えた学生が50%以上になり、「ゼミナールⅢ」でも25%の学生が目標スコアを超えている。さらに2019年度生については「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「ゼミナールⅢ」すべてにおいて、受講後目標スコアを超えた学生が50%以上になった。また、1名の学生が710点というスコアを取得し、2名の学生が650点以上のスコアを取得した。

この結果の要因について年度ごとに考察すると、2017年度は筆者がTTTに参加し、2年次の科目（「ゼミナールⅡ」と「ゼミナールⅢ」）で新しいスタイルの指導法を取り入れた学年にあたる。しかし、1年次の「ゼミナールⅠ」でスコアに直結するようなTOEIC L&Rテストに関する知識を教えていなかった（正確には「教えられなかった」）ので、「ゼミナールⅡ」に本来「ゼミナールⅠ」で行う指導を織り交ぜる必要があった。そのため、本来学習すべき内容が不十分になってしまった。これは「ゼミナールⅢ」にも悪影響を及ぼした。スコアカウンセリングシートによる個別指導に注力するあまり、学習にアクティビティーを取り入れるなどの工夫が足りなかった。上述したように、この2科目は学生の集中力維持が難しい時期にもかかわらず、個別指導後は問題集で弱点を強化することに終始してしまった。本学学生にとって最初の関門である400点を超えた学生は増えたが、本来の目標である500点以上を取得した学生は2名にとどまってしまった。

このように、2017年度は十分な成果を出すことはできなかったが、それでもスコアカウンセリングシートと個別指導が学習モチベーションの向上に寄与することに関して確信を持つことができたのは大きな収穫であった。そこで、上記の失策の



反省も踏まえながら学習内容を精査し、2018年度からは「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「ゼミナールⅢ」と段階的な学習が可能になるようにした。具体的な内容は先に述べたとおりである。2018年度生は、特に「ゼミナールⅡ」以降、グループワークを取り入れることにより同一レベルの学生が一斉にスコアアップできないかを模索しながら授業を進めた。様々なアクティビティーを取り入れたのもこの学年からである。そのようなテキストを超えた工夫が「ゼミナールⅡ」と「ゼミナールⅢ」60%以上の学生が400点以上のスコアを取得や、500点以上取得学生数増加につながったと考えている。

2019年度はグループワークやアクティビティーを頻繁に取り入れて、ゼミ生全員の400点以上取得を目指したが、残念ながら達成できなかった。その要因は、コロナ禍によって必然化したオンライン授業という授業形態だと思われる。もちろん最終的な要因は筆者の力不足ということになるのだが、筆者が授業内で取り入れているアクティビティーは、学生たちが活動している中を筆者が適宜ヒントを与えたり、グループまたは個別に指導したり、あるグループでの気づきを全体に共有するなど、対面授業形式で効果があるものが多い。そのため、それがオンライン授業になった際に、PC経由でそれを十分再現できなかったのである。幸い、2018年度生の結果から、授業中の説明を省きアクティビティー主体に切り替えたいと考え、反転授業形式を導入しようと企図していたので、動画による説明を取り入れることはできた。しかし、アクティビティーの部分は準備がうまくいかなかった。また、学生からも意見があったように「自宅だと集中できない」「勉強している感じになれない」といった状況もあり、学生も筆者も不完全燃焼という感覚を拭えなかった。それでも「ゼミナールⅡ」受講後、目標スコアを88%の学生が取得し

ていることには、2つの要因が考えられる。一つは、学生の受験モチベーションの向上である。1月のIP TOEICテストの後、本来ならば3月に公開テストを受験させる予定で、特別講座も実施した。しかし3月以降の公開テストが中止となり、仕方なく4月から始まったオンラインIP TOEICテストを受験させた。しかしこれは受験の勝手がかなり異なり、学生からは「公開でもIPでもいいから、いつになったら紙面でのテストが受けられるのか」と再三質問があった。これは筆者にとっては意外なことだったが、学生が受験を渴望したのである。この受験へのモチベーション向上があったからこそ、難しい就職活動を強いられた時期にもかかわらず、学習意欲を失わずに済んだのかもしれない。もう一つはオンラインだからこそ個別指導が機能したのだと考えている。学生の受験モチベーションを維持するために、個別指導を徹底した。そして模試を活用し、自分の弱点を徹底的に強化することに集中させたのである。弱点のポイントをある程度スコアアップできたら個別指導により次の課題を出すことを繰り返した。かなり強引な手段に見えるが、この方法でオンライン授業をした後、各自『公式問題集』で時間を測って実力テストをするように指示したところ、700点台に到達した学生が3名も現れた。2019年度後期は対面授業が再開されたことを受け、予定通り情報処理力向上トレーニングを実施した。ここではなるべくアクティビティーを取り入れたかったが、ソーシャルディスタンスの問題からグループワークはできないので、反応速度向上トレーニングをPart 7, 3, 4で実施した。十分なトレーニングができたか不安であったが、最後のIP TOEICテストで88%の学生が400点以上、59%の学生が500点以上を取得し、さらには700点台の学生も排出できたことは一定の成果と考えていいと思われる。

### 3. まとめ

ここまで、筆者が2017年度末にTTTに参加して以来、そこで学んだ知見を基に実施してきた新しいTOEIC L&R テストスコアアップトレーニングとその実施成果を紹介してきた。そして現在までの結果として、2017年度以前と比べると学生のスコアが格段に伸びていることがわかった<sup>24</sup>。参考までに、記録を取り始めた2009年度生から2016年度生の卒業までに500点以上取得した学生数は、500点台が8名、600点台が1名、700点台が2名という状況であった<sup>25</sup>。つまり、8年間で11名しか出すことができなかつた500点以上の取得者について、2018年度生以降はほぼ同数を毎年輩出していることになる。この結果は、一応の成果と考えていいだろう。

一方で、トレーニングで導入しているアクティビティーはトライ&エラーの繰り返しである。第2章で紹介した手法はすべての学生に対応できる絶対的なものではない。実のところ、筆者が「TOEIC (初級)」や「TOEIC (中級)」で行った指導は、「ゼミナール」で実施して効果があったものを取り入れている。しかし、「ゼミナール」ではうまく機能しても他の科目では機能しないものもあるし、逆もまたしかりである。どの手法をどのクラスで取り入れるかは、2つの要素で決まるのではないかと筆者は考える。一つは学生のNeedsとWantsを最初に把握しておくこと。そしてもう一つはその変化に対応するということである。筆者はこの変化を「スコアへの意識」と考えている。初心者コースでNeedsの大きい学生に対して、効果があるからといってどのようなアクティビティーを実践してもやる気をなくすだけである。なぜなら授業前アンケートで目標スコアを書かせても、それは現実味を帯びていないためである。なぜそのスコアになりたいのか、そのスコアに到達することがど

れだけ大変かを全く理解せずに、悪い言い方をすれば、「書く欄があったから書いた」スコアなのである。もちろんそのスコアを取得させるために指導するのだが、トレーニングが「効果」になるとき、重要な要素の一つが「動機」である。したがって、どこかの段階で「とりあえず書いたスコア」を「本気で取得したいスコア」に変えなければ、どんなに効果的な手法も「効果」にはつながらない。筆者が特に初級クラスで意識しているのは、どこかの段階で「できた感」を持たせるアクティビティーを導入し、目的を変化させることである。実際に「ゼミナールI」では、目的として「就職に必要なだから」という理由だった学生が、トレーニングを経て「就職にも必要だけど、それとは関係なく500点取ってみたいとなった」と学習の目的を変化させることがある。全員がそうなるわけではないが、数名の学生がそうなるとその変化が他の学生にも波及するように感じる。この変化をしっかりとらえてアクティビティーを選ぶことで、より高い成果につながる授業になるのではないだろうか。今後も学生のNeedsやレベルにかかわらず学生の意識にWantsの要素を芽生えさせ、それを伸ばせるような教育手法を模索しなければならない。

その一つの可能性として筆者が考えていることが、ICTの活用である。授業外学習で学生が取り組めるタスクをテキスト以外から用意できると、学生の学習への集中力を途切れさせずに、モチベーションを維持または向上させながら「効果」につなげることも可能ではないかと考えている。現在筆者が取り組んでいるのは、反転授業と本学e-learningシステムを用いた本学学生向けの問題作成である。前者についてはTOEIC L&R テストの各パートの解説の動画を作ってみたが、一言でいえばパワーポイントを使った「講義」の域を出ておらず、学生の学習動機に変化を及ぼすものではない。視聴時間、コンテンツ共にまだまだ不完全

だと言わざるを得ない。これは今後精度を高めるつもりである。後者について、本学学生にちょうどいい練習問題を e-learning 上に用意することで、自宅学習のサポートや自主学習につながると考えている。昨今の学生はスマホを常に携帯していて長時間使用するのに慣れている。そこで、スマホ上で学習できるコンテンツが用意できれば学習効率も上がるのではないかと考えたのである。その手始めとして、Quizlet というアプリを使用した単語学習コンテンツを作ったところ、多くの学生が積極的に取り組むようになった。ICT を利用したコンテンツが学生にとって利用しやすいものであるなら積極的に活用する必要がある。「湘北版 TOEIC L&R テスト e-learning コンテンツ」のようなものが開発でき、その効果が表れた時にはその事例も紹介したい。

最後に、もう一つ筆者が取り組みたいことを挙げて本論を締めくくりたい。それは、スコアカウンセリングシート作成の自動化である。IP TOEIC テストであればまとめて結果が出るので、もしかしたら自動化できる方法があるかもしれないが、公開テストを含めるとなると具体像が全く見えてこない。スコアカウンセリングシートを作成することにももちろん意味はあるが、配布するだけでは意味がない。そのシートを基にしっかりとアドバイスを与え、結果につなげることが重要な目的なのである。現在はシート作成に時間がとられてしまい、カウンセリングに充てる時間のほうが少ないと感じている。そのため、これを逆転させる方法を模索している。加えて、「学習ノート」のオンライン化にも取り組みたい。この際、学生本人だけでなく筆者にもその内容が閲覧できるものが望ましい。スマホなどで記載できるシステムにすればもっと簡単に学習の進捗が確認できるうえに、スコアカウンセリングシートと合わせた個別指導の精度も挙がるものと確信している。この論文を

読んで下さった方で、そのような方法に関する知見をお持ちの方がおられれば、是非アドバイスを頂戴したい。

孫子の言葉に「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」という言葉がある。原文の日本語訳は「彼れを知り己れを知らば、百戦して殆うからず。彼れを知らずして己れを知らば、一勝一負す。彼れを知らず己れを知らざれば、戦う毎に必ず殆うし<sup>26</sup>」というものであるが、これは TOEIC L&R テスト対策にも当てはまると筆者は考えている。学生には TOEIC L&R テストについて知り、自分自身のことを知ってもらうことを常に意識しながら指導してきた。スコアカウンセリングシートによる個別指導はそのために重要な要素になると確信している。実際に、「ゼミナール」の結果から、このスタイルがスコアアップにつながっていることは明らかであるが、それでも目標スコアに到達できない学生も散見される。将来的には受講生全員の目標スコア取得という状況を創り出したい。スコアが上がったと喜ぶ学生の笑顔は筆者にとって最高のエネルギー源になる。より多くの学生がこの笑顔になれるように、これからも研鑽を続けたい。

注

- 1 山形俊之「TOEIC® Listening and Reading Test 高得点取得を目指した学習指導法～TOEIC®L&R テストスコアアップ指導者養成講座での学び～」(『湘北紀要40号』) PP. 29～47。
- 2 学生の対象年度の表記について、本論では入学年度を基準として「○○年度生」とする。したがって「2017年度生」は「2017年度に在籍している学生」ではなく「2017年4月に入学した学生」ということである。
- 3 本論における TOEIC® Listening and Reading テストの表記について、学外で受験したものは「公開テスト」、学内で受験したものは「IP TOEIC テスト」とし、特に区別が必要ではない場合は「TOEIC L&R テスト」とする。
- 4 本章で述べる内容の詳細は、山形 PP. 38～43 参照。実際、内容はかなりの部分が重複するので、ここでは本論の展開に必要な情報を簡潔に述べるにとどめる。
- 5 TOEIC L&R テストの認定証の呼び名は公開テストか IP (団体) テストかで異なるが、本論では両方をまとめて「成績表」という表現に統一する。詳細は山形 P. 38 を参照されたい。
- 6 IIBC ホームページ「公式認定証の形式」参照 ([https://www.iibc-global.org/toEIC/test/lr/guide04/guide04\\_02.html](https://www.iibc-global.org/toEIC/test/lr/guide04/guide04_02.html))
- 7 山形、P40。  
「間違えた数/解いた設問数」や、単純に解いた設問
- 8 問題数だけを記載する学生もいる。
- 9 本学では TOEIC L&R テストのスコアを卒業要件などに設定してはいないので、一定のスコアが Needs になることはない。したがって2年生にとって Needs になるのは「就職先から求められたから」というものが多い。しかし実際は、就職活動期間中の2年次前期に実施されるこれらの科目でそれが記載されたことはないので、筆者は Wants の向上と考えている。
- 10 2020年度から、2年生向けの初級科目「TOEIC (初級) B」を前期に開講したが受講者がおらず閉講した。
- 11 2018年度と2020年度は別な教員が担当している。
- 12 副教材については「ゼミナール」参照。
- 13 もちろん「ゼミナール I」の段階で解いていた問題に情報処理力が不必要というわけではない。ただ、それを意識しなくても解ける問題に優先的に取り組んでもらったということである。
- 14 実際にはこのトレーニングができるレベルにない

- 学生もいるのだが、卒業後に独学で TOEIC L&R テストに挑戦する機会もあるだろうし、卒業後に今よりも高いスコアに到達し、さらにスコアアップしたいと望む場合もあるだろうと考え、このトレーニングはすべての学生に課している。
- 15 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が6名(38%)、100～150点が6名(38%)
  - 16 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が3名(19%)、100～150点が2名(13%)
  - 17 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が5名(31%)、100～150点が3名(19%)
  - 18 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が6名(30%)、100～150点が8名(40%)、150～200点が1名(5%)
  - 19 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が6名(30%)、100～150点が2名(10%)
  - 20 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が6名(30%)、100～150点が3名(15%)
  - 21 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が2名(12%)、100～150点が6名(35%)、150～200点が7名(41%)
  - 22 550点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が3名(18%)、100～150点が0名(0%)、150～200点が2名(12%)
  - 23 50点以上の向上を見せた学生数の内訳は、50～100点が8名(57%)、100～150点が3名(18%)、150～200点が2名(12%)
  - 24 2016年5月より TOEIC L&R テストの形式が現在のものに変更されたが、IP TOEIC テストについては2017年4月から変更になった。今回2016年度生までのスコアに関して言及しなかったのは、変更前の形式だったためである。
  - 25 700点台は2014年度生と2016年度生に1名ずつ。600点台は2015年度生に1名、500点台は2012年度生と2013年度生に1名ずつ、2014年度生に4名、2016年度生に2名。
  - 26 浅野裕一『孫子』P. 54

《参考文献》

- 浅野裕一『孫子』(講談社,1997)  
 山形俊之『TOEIC® Listening and Reading Test 高得点取得を目指した学習指導法～TOEIC® L&R テストスコアアップ指導者養成講座での学び～』(『湘北紀要40号』(2019))

## A Report on the Score-Up Training for the TOEIC® Listening and Reading Test with Abilities Measured

Toshiyuki YAMAGATA

### **【abstract】**

To improve students' score for the TOEIC® Listening and Reading Test, we have tried to introduce a lot of teaching methods. Since 2018, we have introduced a way of teaching, in which we let the students pay attention to Abilities Measured. That makes the students to find out their own weak points and concentrate on improving them effectively. In this paper, we will introduce some examples of teaching methods for the training classes for TOEIC® Listening and Reading Test. Also, we will provide the results of these classes.

### **【key words】**

English Education, TOEIC

